

踐踏後人有詩讚曰、
落盃者不計其數人如潮湧馬似山崩自相
塵之病體樵夫難聽虎豹之吼一時棄鎗
衆將一齊望西逃奔正黃口孺子怎聞霹
裂倒撞于馬下曹操便回馬而走于時是諸軍
矛又喝曰、「戰又不戰、退又不退、
有退心、張飛望見曹操後軍陣脚移動、乃挺
此誰敢來決死戰、曹操見張飛如此氣概、頗
言未已、張飛睜目又喝曰、「燕人張翼德在
逢不可輕敵、
百萬軍中取上將之首、如探囊取物、今日相
傘蓋回顧左右、曰、「吾向會聞雲長言、「翼
如巨雷、曹軍聞之、皆股栗、曹操急令去其
「我乃燕人、張翼德也、誰敢與我決一死戰、
得是曹操心疑、親自來看、飛乃厲聲大喝曰、
眼隱隱見後軍青羅傘蓋、旄旗、旗來不到、料
曹操聞知、急上馬、從陣後來、張飛睜目、環
張翼德、大鬧長坂橋、

【書き下し文】

曹操聞きて知り、急ぎ馬に上り陣後より来たる。張飛環眼を睜円し、隱隠として後軍の青羅の傘蓋、旄鉞旌旗の来たり到るを見る。是れ曹操心に疑ひ、親しく自ら来たり看ると料り得たり。飛乃ち声を厲まし大喝して曰はく、「我は乃ち燕人張翼徳なり。誰か敢へて我と一死戦を決せん。」と。声は巨雷のごとし。曹軍之を聞き、尽く皆股栗す。曹操急ぎ其の傘蓋を去らしめ、左右を回顧して曰はく、「吾向に曾て雲長の言ふを聞く、『翼徳百万の軍中に于いて上將の首を取ること、囊を探りて物を取るがごとし。』と。今日相逢ふ。軽しく敵とすべからず。」と。

言未だ已まざるに、張飛目を睜り又喝して曰はく、「燕人張翼徳此に在り。誰か敢へて来たり死戦を決せん。」と。曹操張飛の此くのごときの気概を見て、頗る退かんとする心有り。張飛曹操の後軍の陣脚の移動するを望み見て、乃ち矛を挺へて又喝して曰はく、「戦ふか又戦はざるか、退くか又退かざるか。」と。

喊声未だ絶えざるに、曹操身边の夏侯傑驚き得て肝胆碎裂し馬下に倒撞す。曹操便ち馬を回して走る。是に于いて諸軍衆將、一斉に西を望みて逃奔す。正に是れ黄口の孺子、怎で霹靂の声を聞かん。病体の樵夫、虎豹の吼ゆるを聴き難し。一時に鎗を棄て盔を落とす者、其の数を計らず。人は潮の湧くがごとく、馬は山の崩るるがごとく、自ら相踐踏す。後人詩有り讚へて曰はく、

長坂橋頭殺氣生じ

鎗を横たへ馬を立てて眼円く睜る

一声好だ似たり轟雷の震ふに

独り退く曹家百万の兵を

【口語訳】

曹操は様子を聞くと、急いで馬に乗って陣の後ろからやってきた。張飛がどんぐり眼を見開くと、ぼんやりと青い絹張りの傘、白い旗飾りと黄色いまさかりや軍旗が近づいてくるのが見えた。さては曹操が様子を気にして、じきじきに自らやって来たのだと推量した。張飛は声を張り上げ怒鳴って言った、「我こそは燕人の張翼徳である。誰か進んで俺と命を賭けて戦う者はおらぬか。」と。その声は大きな雷のようであった。曹操の軍勢はこれを聞くと、みな恐怖で足が震えてしまった。曹操は急いで傘を隠させ、そば近く仕えている者を顧みて言った、「わしはかつて雲長（関羽）が『翼徳は百万の軍勢の中に入って大將の首を取ること、袋の中から物を取るようによつてのける。』』と言うのを聞いた。今その様子を見た。軽々しく戦ってはならぬ。」と。

その言葉も終わらないうちに、張飛は目を見開き、またも大喝して言った、「燕人の張翼徳ここにあり。誰か俺と命がけで戦うものはおらぬか。」と。曹操は張飛のこの迫力を見て、退却しようとする思いを強くした。張飛は曹操の軍の後方が動いたのを見ると、矛を構えてまた怒鳴っ

て言った、「戦うのか戦わないのか、逃げるのか逃げないのか。」と。

この叫び声が消えないうちに、曹操の側にいた夏侯傑が驚いて肝を潰し、馬から落ちて倒れ込んだ。

曹操はたちまち馬の向きを変えて逃げた。すると軍の大將たちも、一斉に西へ向かって逃げ出した。まさに、「一人前でない子どもがどうして雷の音に耐えられよう。病気のきこりが虎や豹の声に平気でいられようか。」とでもいうようなものである。あつという間に鎗を捨て兜を落としていった者は数知れない。人は潮が湧くように、馬は山が崩れるように、互いに踏みつけていった。後世の人がこれを讃えた詩を詠んだことには、

長坂橋のほとりに殺気が生じ

鎗を横たえ馬を留めて目をいからした

その声は激しい雷鳴が鳴り響くようで

一人で曹軍百万の兵を退かせた